

春

町随一の桜の名所には
毎年多くの花見客が訪れる

秋津川河川公園

宮園地区から寺迫地区へと
続く桜並木を目当てに、多く
の花見客が訪れる。

益城町のいま

四季

田畑の間には木山川が流れ、南には益城四座がそびえ立ち、四季折々でさまざまな自然の姿を見せてくれます。町の復旧・復興が進む中、この豊かな景色はこれからも残ってほしいという町民からの声が多く寄せられています。



潮井水源

初夏、ホタル観賞を楽しめる。
奥は四賢婦人記念館。



テクノ リサーチパーク

イチョウ並木をはじめ、さまざま
な植物によって緑一色の心地
いい空間に。



藻川

地震で護岸の矢板がずれる
被害があった藻川。上流部は
今も自然の姿を残す。



田植え

益城町の特産品の米。6月ごろ
になるとあちこちで田植え
がスタートする。

緑に覆われる各地
特産の米の
田植えが始まる

夏



飛行機と夕日

町の北東に位置する阿蘇くまもと空港。離発着する飛行機と夕日が美しく重なる。



津森神宮

2023年、町の重要文化財に指定。境内にある大きな銀杏の木は秋になると黄金色に色付く。

稲穂が実りはじめるところ
名勝の彼岸花街道が
赤く染まる

秋



彼岸花街道

寺中地区の木山川沿いに咲く彼岸花一帯は町の名勝。



霜宮神社

上陳地区にある霜宮神社。西に面した鳥居の先に、有明海へ沈む夕日を望める。

冬

田んぼや山裾から
発生する霧によって
幻想的な姿に

船野山

田んぼや木山川から濃い霧が発生し、一帯を包み込む様子は冬の醍醐味のひとつ。

2度の災害で

変わった

ふるさとの見え方

地震をきっかけに15年暮らした東京から帰郷。復旧に一区切りがついたころ再び大きな災害に見舞われました。心折れそうな状況でも、多くの支えと強い信念が玉春さんを前につき動かしてくれました。

たま はる ゆう き
玉春 勇樹

浄恩寺住職

地震翌日に帰省 そこで本震を体験

住職である父の跡を継ごうと思ったのは、地震がきっかけでした。浄恩寺は江戸時代の寛文12（1672）年に創建された寺。これまで代々の住職が法灯を引き継いできました。大叔父から父が寺を受け継いだのは地震の半年前のこと。そのころの私はというと、東京での仕事が順調で、友人も多くいたためずっと東京におるつもりでした。

4月14日、熊本地震発生。翌日、東京から熊本に戻りました。両親の自宅は大規模半壊。お寺の本堂は、壁が抜け落ちました。数日片付けを手伝ってから東京に戻るつもりでしたが、その日の夜中に本震。地震の恐ろしさを身をもって体験しました。



仏の教えに魅力を感じ 跡を継ぐことに

本震後1週間ほど飯野小で両親と車中泊をしていたとき、父は地震で亡くなられた門徒さんのお葬式を執り行うために、法衣と袈裟に着替えて出向きました。葬儀場も被災しており、電気も水も使えない状況でのお弔いだったと聞いて、ご遺族の心中はいかばかりであったかと。

寺に参られる何人もの門徒さんたちも目にしました。ご自身も被災しておられるにもかかわらず、本堂や納骨堂の前で手を合わせる人たちが、どういふ思いでこの場に来ているのか。仏様の教えというのは、それだけのことをさせる力があるのか。

「お寺って誰かが守んなきゃいけない場所なんだ」と、仏教の世界に魅力を感じるようになりました。

地震は思いもよらない転機となりましたが、両親の再建を手伝いたい思いから、数カ月ほど考えて寺を手伝うことを決意しました。葛藤はありましたが、復旧のお手伝いをするのであれば早い方がいいだろうし、5年後に決断するより、体力があり頭がやわらかい今がいい。地震から8カ月後の12月に会社を退職し、翌年4月から京都の僧侶養成学校に入りました。

7月3日豪雨 本堂が崩壊

地震から2年、僧侶として熊本に

戻った私は本格的に父の手伝いを始めることに。その一年後、同じ環境で育ち、僧侶養成学校で共に学んだ女性と結婚し長女が生まれました。坊守（住職の妻）となった妻は仏門を深く理解しあえる存在で、私たちが家族は庫裡（僧侶の住居）で暮らしながら寺を守ってきました。ようやく、地震からの復旧も一区切りがついたというときでした。2023年7月3日、豪雨が発生。朝7時頃に本堂の土間に泥水が浸水し始めたんです。「これはまずい」と仏様を移すなどした30分後、寺の道向こうの山の斜面が崩れて本堂になだれ込んできたのです。

地震のような揺れと、ドドドーンという振動。たった数分の間に壁が破れ柱が折れて土砂が押し寄せて。家族は避難し無事でしたが、本堂は土砂で押し潰されてしまいました。

PROFILE

1983年、益城町生まれ。妻と長女、長男、双子の女の子の6人家族。大学進学で熊本を離れる。東京でIT関係の仕事に就き2016年に退社。京都で僧侶の資格を取り、帰郷。



災害で気付かされた 自分たちの役割

あらためて、自然災害に対して人間は無力なのだと思います。そんな中でも、本堂が盾になったことで納骨堂は無事でした。門徒さんたちが手を合わせる場所が残った本堂によかったと、胸をなでおろしたものです。そこから私たちの、再びの復興が始まりました。

真夏の暑い中での後片付けでも、地域の方々、門徒さん、友人、ボランティアの人たちなど大勢の方々が力を貸してくださいました。皆さんの誠意が心からありがたくて。

失ってしまったものは仕方ありません。けれど、長く受け継がれてきた信仰の場、皆さんの心のよりどころを私の代でなくしてはならないと、本堂再建に力を尽くしています。ただ再建には多くの課題や問題

もあります。

本堂があった場所が警戒区域になつているのもその一つ。雨が降る度に心配は募ります。現在、門徒さんたちをはじめとした建設委員会が立ち上がり、本堂を建てる場所を検討してくださっている最中です。町内外に地震で倒壊して再建をされたお寺さんが結構ありますので、何件か見学させてもらったり。

地震、コロナ、土砂災害と、なかなか安心してお寺に参れない状況が続いておるのですね、早く皆さんが安心してほつとできるお寺になるといいなと思います。

「心が折れそうにならないか」とご心配の声もいただきます。正直、本堂再建までの道のりは大変ですが、これは停滞ではなく前進なんだと。「新しい本堂ができるまでを楽しませてもらっている」。そう考え直すと、物事の本質も変わってきました。

分の心をこの地に預けたからだと思っています。

「復興」は以前の町の姿と同じようになるという意味では、もう元通りには絶対なりえない。その中で「復興」とは何かって考えると、みんながまた安心して暮らせるようになる状況でしょう。ただそれも、ふるさとに戻ってこれない方にとっては、いつまでも叶わないことなので、全員が全員、区切りがつけられるような復興はないと思います。それでも、それぞれの人が「いろいろあったけど、今日があつてよかったね」と思える。そういう一日を増やしていくのが続くのかなと思います。

例えば、「橋が開通してよかったね」「本堂が再建してよかったね」というのを多くの人たちと分かち合える。1つの区切りっていうのは、それはそれで、とても大事なことです。

す。土砂崩れが起きたときにたくさんの方が駆けつけてくれて、うれしい気持ちの方が大きかった。今も門徒さんたちが「新しい本堂が楽しみだ」って言ってくれます。

例えば、父が住職になった半年後に地震に見舞われ、私の代になって2年も経たずに土砂災害が起きしましたが、そこには意味があるのだと思います。たまたま、たまたまではあるけど、私たちにはそういった役割が与えられたのだと。

景色の見え方変わる この地に心を預けて

寺を手伝うべきかと考え始めたとき、こう思つたんです。地震で家が崩壊し、道路も塞がれ、橋も渡れない。以前の風景から一変し、自分が育つた町がとても傷ついている。そんなふるさとと離れて暮らすのではなく、そこに自分も一緒に暮らした

と思うんですけど、そこばかりに注目しすぎると、一緒に喜べない人がいるんじゃないかなって。「1日1日、頑張れる人は頑張らしましょう」の繰り返しとします。

「いずれ私の子どもたちも巣立っていくけれど」「いつか戻ってきたら」「私のふるさとはこちら」という思いを大切にしたいですね。

浄恩寺から望む山裾から田んぼへと広がる景色が好きです。金峰山の方角に沈む夕日の美しさは、この町に戻ってきた私へのごほうびだと思えます。





「益城町立第五保育所」に勤務する
保育士3名にインタビュー。
地震後、園児と接するなかで
驚いたのは「じしんごっこ」をする姿。
地震を経験した子との接し方、
益城町に生まれた子に願うこと。
保育士の視点で語っていただきました。

地震に負けない町で 生まれた子たちへ たくましく育って！

濱田 めぐみ
1985年、熊本市生まれ。
益城町での保育士歴17年。
地震当時は「益城町立第二幼稚園」に所属。

井本 春香
1994年、合志市生まれ。
益城町での保育士歴10年。
地震当時は「益城町立益城幼稚園」に所属。

松谷 聖奈
1994年、菊陽町生まれ。
益城町での保育士歴9年。
地震当時は大学4年生。

らいから開園しよう、という話も出ていた気がするんですね。だけど、その日の夜中に本震が発生。これはダメだなんて思いながら、また翌日職場に向かいました。「第二幼稚園」は自衛隊の本部になり、園庭に自衛隊の車がいっぱい集まったため、危ないから入らないで、となって。ひとまずは町職員として避難所の業務へと向かいました。園に戻れたのは1カ月後くらいだったと思います。

井本…当時勤務していた「益城幼稚園」は避難所になったので、避難所としての運営が始まりました。私は交流情報センター「ミナテラス」の避難所運営に2週間ほど行きました。避難者のお手伝いや、事務処理などを行っていました。園の業務に戻れたのは、私も1カ月後くらい。「益城幼稚園」は園舎が無事だったから、割と早く園児の受け入れが再開できました。ご飯は、なんでもいいから食べられるものを持たせてくださいと保護者の方々にお伝えして。

濱田…「第二幼稚園」は、園舎が壊れて使え



写真左より 濱田めぐみ、松谷聖奈、井本春香

— 地震発生時はどのような状況でしたか？
濱田…前震の翌日、朝イチで当時の所属先の「第二幼稚園」に向かおうと思ったたら、道がボコボコで、迂回して迂回して出勤に時間がかかったのを覚えています。ようやく着いたら、保育室は子どもたちの道具入れとかが全部床に散らばっていて、出勤できた先生たちと一緒に片付けました。その日は休園となつたんですが、どうやって保護者さんに連絡したのかは覚えていません。

井本…前震の日、私は大学卒業直後で入職3日目だったんです。子どもたちの顔もまだ覚えていない段階。住んでいた合志市も震度6でしたが、益城町に来たら壊れ方が比にならなくて、「全然、世界が違うな」と感じました。そして私は、とにかく入職3日後だから、もう、何から何まで全然分からない。園児の安否確認をと言われて、100人超の全園児へ電話をしました。その間に他の先生方で、園内の片付けをしていた感じですね。

濱田…園内が片付いたから、翌日(16日)く
ない箇所があったので、そこまで本格的な呼びかけはしていません。どうしてもお仕事に行かないといけない保護者の方々のお子さんは受け入れていました。ちよつとずつちよつとずつ、日常に近づいていったかな。

— 松谷さんはまだ入職前だったとか？

松谷…私は熊本市内の大学の4年生でした。公立園の保育士を目指して公務員試験を受ける予定で、その勉強をしているときの被災でしたね。自宅は菊陽町なのですが、ニュースで益城町の状況を見ていたので、「ボランティアに行きたい」と親に言ったんですが、「危ないから、行かない方がいい」とって止められました。ようやく落ち着いたところに、1回ボランティアに行けましたね。

— 地震後、園児さんの変化や、子どもたちに対する思いの変化はありましたか？

井本…変化で言うと、子どもたちの「じしん

「ごっこ」はずごかった。

濱田…「じしんです、じしんです」って子どもたちがアラートの声を言っていたんですよ。それで、自分たちが机の下に隠れたり。

井本…砂場のお山を崩して「じしんでこわれました」とか言って遊んだり。なんかすごい印象に残っています。

濱田…地震後に、子どものケアについての研修を受ける機会が多くあって、「子どもたちのそういう行動は止めないで」と言われていました。最初は胸が苦しかったんですけど、でもこれが多分、子どもたちが経験した本当の様子だから、もうこれは何も言えないと思って、止めたりもしませんでした。あえて「地震のとき、どうしたの?」と聞いたら、子どもたちは「こうやって机の下に隠れた」「おうちの人が守ってくれた」「何か落ちてきた」と言ってきて、「あー、怖かったんだね、でもお家の人が守ってくれてよかったね」と話しました。そして、「先生はみんながこうやって幼稚園に来てくれてうれしいよ。無

一緒に遊んでくださいって。「益城幼稚園」に通う子どもたちもいたと思います。

井本…そうだったんだ!

松谷…テレビなどで益城町の被災した状況を見ていたので、覚悟していかないといけないと思っていました。でも、いざ子どもたちと接すると元気いっぱいな普通の子たち、という感じでした。一緒に遊んで楽しかったことがきっかけで、「益城町の子たちと関わりたい」と思うようになり、益城町の保育士を志望したんです。無事採用いただいて、翌年に「益城町立第一保育所」に配属になりました。

濱田…当時は「第一保育所」の園舎が被災で使えなかったの、しばらくは「第二幼稚園」に間借りして保育をしていたんですね。

松谷…はい。地震から1年経ってからの就職でしたが、保育所も全然元通りではないし、仮設団地から通う子どもたちもいるけど、家や遊び場が狭くてまだまだ生活が大変そうなお話は感じていました。



事でよかったね」という話をたくさんした記憶があります。

井本…私はあんまり記憶がなくて。もう目の前のことで精一杯でした。何しろ、仕事を始めて数日での被災で、実際の子どもの前で言う保育自体が初めてだから、子どもたちの様子が普通なのか普通じゃないのかも、いまい分不清らない。なので、他のクラスの先生の「今日、こういう風に不安がっている子どもがいた」というお話や、研修での話はしっかり聞けなきゃと心がけました。自分は保育士になって日が浅くて、まだ自然に対応できる状況じゃなかったから、考えながら保育をしていた感じでした。本当に一生懸命だった。

——松谷さんが益城町にボランティアに参加されたのはいつ頃でしたか?

松谷…何カ月か経った頃、夏前くらいだったと思います。「益城幼稚園」の前にあった仮設住宅へ、子どもたちと遊ぶボランティアに行きました。幼児から小学生まで年齢問わず、

——地震後、どういうふうにして園に日常に戻ってきたでしょうか?

濱田…子どもたちが園に來始めたから、「や」と始まった」と思いましたね。園にいる間は、とにかく地震のことを忘れて楽しく遊んでほしいという思いでした。

井本…震災後、いろんなボランティアの方が園へ保育の時間の合間にシヨールなどをしに来ていただきました。それがだんだん少なくなると、「今日は何もなしよ」という日がいっぱいできてきたときに、「これが普通なんだろうな、きつ」と日常を感じました。そう感じられるようになったのは地震の翌年かな。

濱田…みんな、地震に負けずによく頑張ってきたなって思います。町が復興しているな、元に戻るんだなと実感して、子どもたちもそれにちゃんとついてきて、頑張ってる日常を取り戻したんだと思うと、すごいなって。

松谷…私は地震1年後の入職だったので、地震前後に出生された保護者さんに「大変だったでしょう?」と声掛けすると、明るく話さ

れるくらい落ち着いていて、日常になっていた感じでした。でも、地震を経験した園児たちは、地震訓練がすごい上手だと感じました。**井本**…「逃げ遅れたら危ない」というのが実体験で入っているから。「おうちがこわれるもんね」という言葉が子どもたちからすつと出てきます。

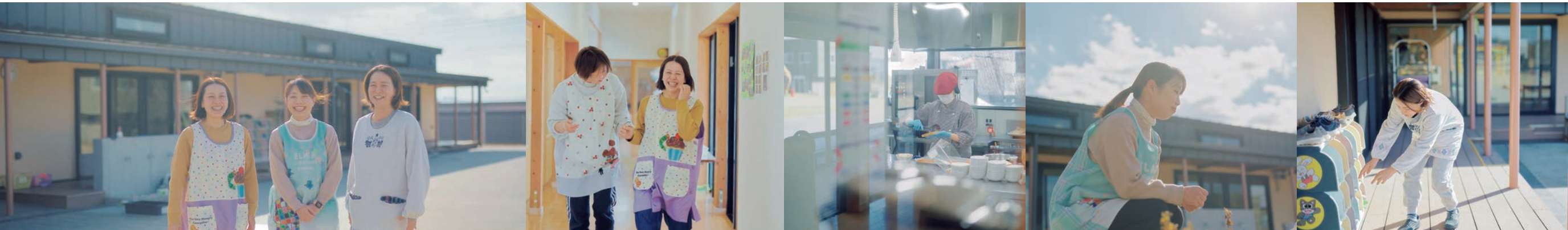
濱田…地震を経験していない子は、やっぱり訓練でも反応がイマイチなんですよね。ただ正直、「地震の発生が夜だったからまだよかった」というのはありますね。子どもたちが園にいるときだったら、どうなっていたかと。災害の際に子どもたちを避難させる経験はしていないので、地震訓練は日頃から行っています。机の下にもぐって、ダンゴムシポーズをしましょうって。

井本…園児さんでPTSDのような症状が表に出ている子はそこまでいなかったです。小さい子たちばかりだし、おうちの人がいる安心感が大きいんじゃないかなとは思っています。

濱田…でも、今思い返せば、爪を噛んでいる守る行動を取れて、困っている人に手を差し伸べられる人になってほしい。つらいから忘れる、じゃなくて覚えてほしい。**濱田**…地震の経験を忘れないでほしいと思います。まずは地震の年に第一子を妊娠したので、自分の子は地震のことは知らないのですが、「地震のときはここは大変だったんだよ。大変な思いをして、それで今の生活があるんだよ」って話はするようにしています。みんなのおかげで日常が戻っているということをおかさないでほしいですね。

——益城町で生まれ育つ子どもたちにどんな言葉をかけたいですか？

井本…たくましく育ってほしい。地震を経験していない子たちも、震災のことを聞く機会や展示がいろいろあるから、自分の生まれた町でこういうことがあったんだっていうのは知っていてほしいです。地震なんて経験しないのが1番いいんですけど、毎月の避難訓練は、子どもにとっては「なんでしなきゃいけ



子とかがいたりして、それで不安を表していたようにも思いますね。

井本…お漏らしも多くなったり。

松谷…1年以上経っても、まだ「じしんごっこ」の名残がある子もいました。

井本…そういうサインは見逃さず、でも特別どうしようというよりも、とにかく普通の子どもが安心できる生活をしていけたらなというの、日々思っていました。

濱田…そうですね。今まで通りの生活を、というのを前提にして保育をしていました。

——当時の子どもたちは今、小中学生。その子たちに思うことは？

井本…当時、いっぱいいっぱいのおかげで保育していた子が、中学生になって職場体験に来てくれたんです。地震うんぬん関係なく、ここまで大きく元気に育ってくれてうれしく思いましたね。

松谷…地震を経験した子には、動ける人になってほしい。経験したからこそ自分の命を

ないんだ”って思ってるかもしれないけど、でも、「絶対意味があるからね」ってすごく思います。

松谷…強く育ってほしいです。地震を経験していない子も経験してる子でも、日頃の地震訓練や、避難道具の準備などできるような子たちになってほしいな。

濱田…益城町で育ったことを誇らしく思っしてほしいです。地震に負けない町で育って、立派な大人になってもらえたらなって思いますね。私自身も益城町で子育てをしているのですが、施設面でも制度面でも子育てのしやすさは実感しています。

井本…益城町はきょうだいが多い家庭も多いですもんね。人口も増えてきているとか。

濱田…地域の住民の方も、子どもたちや子育てを温かく見守ってくれる雰囲気がある。すてきな町なので、ここで育つ子たちも、町民の方も、自信を持ってほしいと思います。

地域と災害の歴史

人文学的に研究し

後世に伝えたい

地震でひどく傷んだ町の文化財。
堤英介さんは学芸員として
復旧と保護・保存に奔走しました。
その仕事で改めて地域における
文化財の意義を知ることになりました。

つづみ えい すけ
堤 英 介

益城町教育委員会
生涯学習課生涯学習係主任

本震発生直後は 覚えていません

町の学芸員として文化財保護や保存に取り組んでいます。地震前は、道路や建築物を造る前に遺跡を発掘調査して記録・保存したり、町の偉人である四賢婦人（※）の足跡を調べて顕彰するといった業務に取り組んでいました。

前震が発生したのは帰宅の途中でした。菊池市の自宅に戻ろうと自分の車を運転していたら、急にハンドルが利かなくなり、街灯を見ると大きく揺れています。大学時代に京都で経験した阪神・淡路大震災と状況が同じだ、地震だと直感しました。

役場に電話すると「道路が陥没して危険だから、夜が明けてから登庁を」との指示。帰宅後、テレビのニュースに映った役場の様子を見



て、「これは本当に現実なのか…」と信じられませんでした。

翌朝の出勤途中で、四賢婦人記念館や道路沿いの文化財を確認したら、大きな被害はない様子でした。登庁後は災害対策本部に配属され、電話対応を担当。その日は応対に追われ、日付変わって深夜1時頃。上司から「もう寝よつか。起きとつても電話鳴らんど（鳴らないだろう）」と言われ、役場3階の会議室で仮眠を取ろうしたところに本震が起きました。次の瞬間、自分がどうなっただか覚えていません。

倒れたキャビネットの山を越えて通用口から外に出ると、一面、砂煙や土埃が舞って、カビの臭いが充満。泊まり込んでいた職員十数人は、

全員無事でした。家族に電話して無事を確認した後、災害対策本部を屋外に移す作業を行い、夜明けを待つて帰宅しました。翌日からは支援物資の集荷場担当に。寝る間もなく受け入れに当たりました。熊本県トラック協会のトラックに同乗し、道案内しながら避難所に配達するのが2週間ほど続きました。

布田川断層帯を 国の天然記念物に

文化財の被害状況確認に取り掛かれたのは4月30日からだったと思います。その日、文化庁の調査官が被害状況の確認に来られて、文化庁と県文化課の職員同席の上、今後の文化財調査・復旧について話し合います。

町の学芸員は私一人しかいないため、阪神・淡路大震災や東日本大震災での学芸員派遣の実績などを聞いて、不安が少し和らぎました。最初に現地を見に回ったのは5月7日。休みを取って、借りた原付で。やっぱり機動力が大事なんで。文化財約300カ所を掲載した地図を見ながら、お堂や仏像、神社を調査。地震前と比較して半壊、全壊など4段階で判定していきましました。結果、約6割の文化財が被害を受けていました。

5月10日、今度は文化庁天然記念物担当の調査官が来て、町内に表出している3カ所の断層の保存に向けて取り組みがスタートしました。前震で多くの研究者が現地入りした後、本震があったため、地表に現れた断層にすぐブルーシートを掛けるなどして保存することができました。

PROFILE

1976年、山鹿市生まれ。2000年に益城町に入庁し、学芸員として文化財の保護、保存などに取り組む。妻と子ども2人の4人家族。



この迅速な対応が、震災遺構として国の天然記念物「布田川断層帯」に指定された要因の一つに挙げられます。

国の天然記念物にするには、町指定から県指定へと段階を踏む必要があります。断層の保存によって、地震を経験していない人でも追体験ができ、防災・減災をわが身のこととして考えるきっかけになります。町指定にするには文化財保護委員会を開かないといけません。避難所生活の方が多かったため、電話やメールなどで連絡を取り合い、地震から2カ月後に町指定となりました。

国の天然記念物指定には本来、3年ほどかかりますが、布田川断層帯は約2年で指定に至りました。

地域の文化財復旧が コミュニティの維持に

文化財の被害状況を視察している

思うんです。ちゃんと後世に伝えていければ。それも歴史ですから。

地名と災害履歴の 関連を解明したい

断層の調査は主に、電子機器を使って分析する理化学的手法で行います。名だたる大学の調査に同行し、その様子を見るにつけ、人文系の学芸員である私は、地震の調査に関しては無力だなと感じました。

堂園地区の地割れを見たときのこの瞬間的に「大蛇ってこればいい」と思いました。ここには大蛇伝説が残っていて、大蛇が掘ったとされる池があります。布田川断層帯では約2000年前にも大きな地震が起きたことが分かっています、その際に表出した断層を当時の人たちが「大蛇が地を這った跡」に見立てたんじゃないか。大蛇伝説とはこの地の人たちが大地震を後世に伝えるための話

ときのことです。あるべき場所にお地蔵さんが見当たりません。近所で聞き込みすると、「あれは大事で、雨に濡れよったけん、俺ん家に軒先避難させとった」という方がいらっしやいました。地域の文化財って、国や県に指定されていなくても、住民にとってはそれ以上の価値があるんだと感じましたね。だから地域の文化財の復旧に目が向き始めてようやく心の復旧になるのかなって。

ただ、指定文化財でなければ、復旧の補助金制度は利用できない。実は熊本県には全国でも珍しく、文化財担当者の連絡協議会があって、この場で話し合い、県の復興基金を利用できるよう働き掛けていくことになりました。新潟県中越地震の取り組みを参考に、「地域コミュニティの維持」のために文化財の復旧・保存を要望したんです。結果、復興基金のメニューに加えられました。

なので、と考えたんです。

調べてみると、町に「蛇ヶ谷」という地名があり、伝説では雄と雌の大蛇が野焼きで焼け死んだとされています。まさに布田川断層帯を表しています。地名は、「ここはこういう土地なんだよ」と先人が残してくれたプレゼントなのかもしれません。

地域に残る民話や地名、祭りを人文学的に解明すればハザードマップに落とし込むことができます。町内には「蛇ヶ谷」があれば「辰崩」もある。津森神社の「お法使祭」は神輿を手荒く扱うことで知られていますが、持ち回りで担当する地区はいずれも地震被害が大きい場所。あれはもしかしたら神輿を投げるのではなく地鎮ではないか。こうしたものを災害関連事象として認識できれば、今の人たちに警鐘を鳴らすことができます。

こうしたことがきっかけで、地名

地震により町外に出て行った人もいる中で、帰るとこってやっぱり、お祭りの存在とか地域の寄り合いとかがあったりするわけです。公民館のそばには意外とお堂とか祠ほくらがあって、それによってお祭りが存続できたりして、要はコミュニティの維持ができるんです。地域文化財の復旧は、学問とか文化ではなく、地域を守るため、心のよりどころを復旧させるためにやっていることなんです。

費用を掛けずに人の手でうまく復旧させた例もあります。例えば彫刻に長けた地元の人が仏像を作り直したりとか。文化財的価値は損なわれるかもしれませんが、それはそれでいいと私は思っています。あるいは違う場所にあった2つの仏像を、再建するのが難しいから一緒にしたとか。信仰の対象としてコミュニティのよりどころになっていけばいいと

と災害履歴のつながりを解明しようとして研究を始めました。理化学的データを基にしたハザードマップの上の人文学的な要素を載せていく。より強固なものになると思います。人文学的事象による災害履歴を解明し、将来の防災減災教育・政策に役立てていきたいですね。全国からの応援への恩返しとして、日本の防災力を上げるというところで貢献がしたいんです。

※四賢婦人：明治時代に女子教育や女性の地位向上に尽力した益城町出身の矢嶋家4姉妹のこと。三女・竹崎順子（熊本女学校を設立）、四女・徳富久子（徳富蘇峰・蘆花の母）、五女・横井つせ子（横井小楠の妻）、六女・矢嶋楯子（東京婦人矯風会を創立、女子学院の初代院長）。



地域の再生に 生かしたい 福祉の力

富嶋智香子さんは益城町社会福祉協議会(社協)の職員として「災害ボランティアセンター」の開設に関わりました。視察で訪れた阪神・淡路大震災の被災地で、復興の難しさとコミュニティの大切さを実感。町民主体の地域活動への支援を続けています。



とみしまちかこ
富嶋 智香子

益城町社会福祉協議会職員

災害ボランティアセンター開設へ

前震が起きたときは、熊本市の自宅にいました。想像を超えた大きな揺れに驚き、ペットの犬を連れて、外の広い場所に出ました。

しばらくして車に乗り込んだんですが、繰り返す揺れで周辺のブロック塀が崩れ、住宅の瓦がガラガラと道路に落ちてきて。車は揺れ、ゴムボールが弾むようだったのを覚えています。

翌朝、益城町役場の近くにあった社会福祉協議会に出動すると、事務所は被災して使えなくなっていました。そんな状況でも急ぎ行ったのが「災害ボランティアセンター」の開設。がれきを撤去する、支援物資を配るなど、ニーズに合わせてボランティアをマッチングさせ、再建に向



視察先で実感した 孤立を防ぐ難しさ

震災の年の11月に、阪神・淡路大震災の被災地、兵庫県神戸市の長田地区に行く機会を頂きました。災害ボランティアセンターの運営の次の段階として、社協が何を準備したらいいのかを想定しておきたかったからです。

そのとき訪れたのが、災害公営住宅として建てられた5階建て団地。単身の方が孤立しないように1階に集会所が設けられ、最初はいろいろな集まりがあったようです。けれど数年経つと、1階まで降りるのを手間に感じたり、団地から離れていく住民さんも増え、参加者が徐々に減っていく。それによって人と人とのつながりが薄れていったそうです。社協が間に入って一人一人の支

けた支援をしていくのが私たちの役割でした。

全国ニュースで益城町は最大震度7の地震に2回も見舞われたと、取り上げられたからでしょうか。海外の方を含め全国からたくさんの方ボランティアさんに来ていただきました。

総務担当の私は、社協の事務所が被災したので、それこそ鉛筆一本から用意。職員も被災していたので、食料の調達に2時間ほどかけ、パンやおにぎりなど2、3日分、買える物をかき集めました。

災害ボランティアセンターの立ち上げにあたり、マニュアルは一応あったんですが、私が担当する総務に関する事項は不足していて。それで、阪神・淡路大震災や東日本大震

災、新潟県中越地震の当時の担当者に連絡を取り、「どのように運営しましたか」と電話で問い合わせ、アドバイスをもらいました。当初は、活動資金の調達の仕方なども全く分からなかったですから、助言はとてもありがたかったですね。

災害ボランティアセンターは震災の翌年4月に閉所。活動費用に充てることができた募金などは、職員派遣や助成金を除き、1億700万円余りに上り、およそ1年間で約3万6000人のボランティアさんを町民約5500件につなぐことができました。

それから私たちは、震災前に行っていた社協の事業を徐々に再開していききました。

PROFILE

1971年、益城町生まれ。震災時は社会福祉協議会の総務課長。2019年地域福祉課長に転任。24年からNPO法人くまもと防災士会理事を務める。



援をしたらいいのではと思っただけ、被災者がたくさんいらっしゃる状況ではそれも難しい。住民さん同士の支え合いが1番大事だなと感じました。

復興って右肩上がりではないことばかりが続くのかなって思っていたのが、実際は数年おきに課題が出てくる。そんな学びも得ました。

益城町では地震を機に、孤立・孤独を解消するため、住民さんたちが仮設住宅で自主的にお茶会を開いたり、委託団体などがコミュニティの場を開設したり、つながりがより強くなる活動をあちこちで見かけました。せっかく立ち上がったたり、つながりが生まれたりしたので、それがなくならないようにしたい。つながりが続く関係を住民さんがつくる、という地域ができたらいいなと今奔走しています。

受講され、13の団体がお茶会、話し相手、地域食堂、認知症マップ作りなどの活動が続けておられます。受講された方に、「何か立ち上げてほしい」と強制はしてないですが、自分たちで新しい取り組みを立ち上げた方、民生委員や地域福祉委員になられた方がいるのはうれしいことです。

将来の災害に備え コミュニティを大切に

10年が経ち、震災を経験していない世代が増えてきました。震災時は子どもで、守られる立場だった人も親となり、子どもを守る世代になってきました。震災経験のない転入者の方もいます。そこで、私は自分の経験を次世代に伝承していく必要があると思っています。幼いころ、祖母から白川大水害の話をよく聞かされました。そのとき、子どもながらに気を付けなきゃって思ってた。その

「地域福祉塾」開講 地域活動の担い手に

2019年、地域づくりに携わる地域福祉課に配属。私は益城町生まれなので、震災後の住民さん同士のつながりの再構築を期待されていたのかな。

長田地区の視察以降、住民さん同士のつながりの大切さを感じていたので、翌20年から「地域福祉塾」を開講しました。

団地（災害公営住宅）内の問題を団地だけで解決する「団地任せ」にするんじゃなくて、できる人がどんどん入ってきて、逆に団地の人がどんどん地域に出ていく。そんな「できる人ができることで支援していく」形ができたらいいなですね。

主役は住民さんで、社協はそのお手伝い。「どういったことが益城町に必要か」「こういう活動が足りないよ

ね」などを住民視点で考えてもらい、あくまでも社協はそのサポートに徹しています。

社協の私が「地域にこれ必要だからやろう」っていうのと、住民さんが「これ足りないよね。だからここ必要だよね」って言って活動するのは、仕組みが全然違います。活動が続いていくためには「住民さんが考える」というのが、地域に必要なんじゃないかなと思います。

一つの例が、塾の卒業生の「まじきおでかけ支援隊」という取り組み。買い物に行くのが不便な場所に住まわれている方を買い物に連れていったり、病院や郵便局へ送ったりという送迎支援が目的ですが、送迎途中の車の中ではべちゃくちゃしゃべって盛り上がっているんです。そういうところから、つながりは生まれると思うんですね。

「地域福祉塾」はこれまで64人がたのは、震災後いち早く駆け付けてくださった、ボランティアさんたちのおかげだと思っています。毎年4月になると、面識のある職員に連絡をしてこられるボランティアさん、直接会いに来られる方もいます。皆さんが町の復興を気にかけていただいているのでしょう。

そうした人たちの思いに込めるためにも、益城町は災害への備えがある町になってほしいと思います。我慢を強いられる避難ではなく、被災しても平時と変わらず、みんなとつながりながら環境の整った中で復興していける、そんな防災と減災の町であってほしいです。

意識は今もあります。詳細は知らないけど、気を付けるべきポイントを小さいときから伝えていく。私が経験したからこそ、防災教育の機会の大切さについて伝えていけるものがあると思います。個人的には、震災の前の月に防災士の資格を取りましたが、その後は活動ができなかつたのですが、2024年からNPO法人「くまもと防災士会」の理事として活動に取り組んでいます。でも、「防災」という言葉でできるだけ使わないようにしています。被災から立ち直ろうとしている方に「防災を考えよう」と言うのは時期尚早だし、それより誰かを気にかけるか、声をかけるとかというつながりのほうが大事だと思うので。つながっておくと、いざというとき助け合いができる。そんなふうに言葉を置き換えて説明しています。

現在、益城町がこれだけ復興でき



人とのつながりで

生まれた

カフェの夢

嫁いだ地域での人との関わりが薄かったという永田彩さんが、被災直後に感じた孤立感。それからの彼女は人とのつながりを大切にしてきました。そして芽生えた夢。希望に満ちた未来の先には地域貢献という目標もありました。

なが た あや
永田 彩
主婦

暗闇の中で感じた 孤立感

益城町で暮らし始めたのは、地震が起きる1年3カ月ほど前です。夫の実家の敷地内に建てた新居に越して、私は長男を出産したばかり。初めての子育てに必死で、家で忙しく過ごすことが多く、知り合いをつくる余裕がありませんでした。やっと離乳食が終わる時期がきて、これからは町の育児サークルなどに参加して、同世代のママたちとも交流を持ちたいと考えていた矢先のことでした。

前震が起きた夜、夫は外出しており、突然の大きな揺れに驚いた長男がギャーツと泣き出して。すぐに抱き上げて家を飛び出しました。夫の両親も「何が起こったんだ」と驚いていて、暗い寒空の下で動揺していた



のを覚えています。

しばらくして夫が戻ると少しは安心しましたが、街灯も消えてしまった家の周辺は真っ暗。車の中に待機していても揺れは続き、心がザワザワして気持ち悪くなりました。「こんなとき、親しい人がこの町にいた情報交換できるのに…」と思いましたが、あのときは益城町に知り合いは誰もいなくて…。どこか、孤立感のようなものを感じていました。

自分より深刻な孤独感 そして、自身への後悔

本震後、私たち家族は総合体育館に向かいました。すでに支援物資が配られ始めており、家族でそれぞれの配給に並んで、私は長男を抱いて

炊き出しの列に並びました。

そのとき、一人のおばあちゃんが私の前に並んでいて、「赤ちゃんを抱えて大変ね」と声を掛けてくださったんです。それからぼつぼつとご自身のお話をされました。「私は一人暮らしですね。地震が起きてから2、3日は家の中でどうにかしのぎ、お菓子とかで食べつないで。ここまでは歩いて来ました」と。

情報も届かない中で不安を抱えながら、たった一人で総合体育館までたどり着かれたんだと思います。話を聞きながら、私なんかよりもっと深刻な孤独感の中におられたんだろうと思うと、すごい衝撃を受けて、とてつもなく切なくなりました。そのおばあちゃんがどこにお住まい

いなのか、せめてお名前だけでも聞いていたら、何かしてあげられることがあったんじゃないか。何もしてあげられなかったことを今もずっと後悔しています。

地震から1週間ほど車中泊をした後、長男を連れて山鹿市の実家に避難。子どもが夜泣きするので、体育館にいたら周りに迷惑がかかっちゃう。みんな疲れてるし、身体も疲れている。誰かと話せばよかったんだろうけれど、そんなしゃべるような関係の人もいない。メンタルが崩壊しそうな本当につらい時間を何日間か繰り返し、このままだと自分がダメになると思って。みんなの仕事が始まって家に誰もいなくなるタイミングで、「実家に帰んなっせ」って言ってもらったんです。山鹿は同じ熊本でもこんなに違うんだって思うぐらい、地震の影響がほぼない。

PROFILE

1992年、山鹿市生まれ。夫と息子2人の4人家族。
別家屋の夫の両親と暮らす。「生米パン」のパン作
りの資格を取得し、カフェ開業に夢を膨らませる。



益城での生活が嘘のようでした。私
は帰れる場所があったんでよかつた
けど、帰れない、帰れる場所がない
人って大変だよなって思うし、不便
だったろうなって。自分はまだあり
がたかったです。

益城と行ったたり来たりしながら、
実家からおにぎりや食料品を持たさ
れるたびに、あのおばあちゃんにも
分けてあげられたのに…と、自身の
無力さについて回りました。

すつかりと 地域に溶け込んで

やがて長男が保育園に通うように
なると、習い事や子どもを通じてマ
マ友たちとのつながりが生まれてき
ました。けれど、次男を身ごもった
2020年はコロナ禍に。やっと友
だちができたのに、いろんな行事や
大会が中止になって、これでまた関
われなくなる…と不安に思いまし

な、と考えるようになりました。

例えば、親子キャンプや防災キャ
ンプができたり、楽しいイベントを
開催する場所をつくれたらいいな。
現在、起業する人たちのためのス
クールに通いながらいろいろと学ん
でいるところです。

カフェの開業も叶えたいこと
です。実家で栽培している米を使っ
て、ミキサーで砕いた生米を生地に
して焼く「生米パン」を試作中。津
森地区の友だちが栽培しているイチ
ゴや、町で生産されている果物や野
菜を使ったりと試行錯誤しながら
ですが、レシピを考えていると楽し
くなってきます。

私と同じようにこの町に嫁いでき
て、結婚後に農業に従事したとい
う友だちもいっぱいいます。「みんな
で一緒に何かやりたいね」って、夢
を膨らませ合っているんです。

た。でも、収束したとき、みなさん
とより仲良くなれた気はしました。
飲みに行ったり、ご飯に行ったり。
保育園や小学校、町の行事…参加す
ればするほど楽しいなって。

私が暮らす上陳地区は、小学生の
登校時間に毎朝、地域の方々が見守
りをしてくださるんです。小学校ま
でのほんの短い通学路に何人も
方々が立たれて、雨の日も風の日も
毎朝欠かさず子どもたちとあいさつ
を交わしてくださいます。そんな地
域性にも引かれ、地域の行事にも積
極的に参加。毎年1月14日には、田
畑を荒らすもぐらを退治する「もぐ
ら打ち」という伝統行事が行われま
す。子どもたちが各家の玄関の地面
を叩いて回ると、お年玉やお菓子を
用意して待っていてくださるん
です。

子ども会の行事で有価物を回収し
たり、地区で流される小学校の連絡

この町に暮らして 本当によかった

県道の4車線化の工事が完成した
ら、多くの皆さんが町の復興の景色
を感じ取れるのではないでしょう
か。ただ私の場合、この町のことを
何も分からないときに地震が起き
てしまい、それまでの街並みや家並み、
里山の景観をよく知りません。だ
から地震からこれまでに移り変わ
った景色が、私を知る町の姿なん
です。

これから、にぎわいのある場所
やお店が増えていったらいいな。あ
ちこちで活気付いたらいいな。そ
して、私もその中の一人として頑
張りたいと思います。

あのとき、よちよち歩きだった長
男は11歳に、次男は5歳になりました。
今、子どもたちはいろんなこと
にチャレンジしています。そんな彼
らの姿に触発されつつ、私も自分の

アナウンスも他の保護者と一緒
にやっています。今では地域にもす
かり溶け込んで、夫より私の方が
なじんではいけないでしょうか。
もう本当にありがたいです。

地震によるつながりと これからの夢

保育園やPTAの会合でも、いろ
んな人たちと出会えました。顔を合
わせる機会があると「地震のとき
はどうしていましたか」と誰彼となく
尋ねました。「(阿蘇熊本空港ホテル)
エミナースにいたよ」「車中泊を
していたなあ」などと知らされてい
うちに、皆さんと同じ思いをして
いたというつながりを感じます。

元々話すのが好きなんですけど、
地震のときもコロナのときも、それ
を奪われたというか、できないのが
つらくて。だから、この町で人と人
をつなげられる場所をつくれたら

夢を叶えたいと思います。

もう、あのときに孤立感を感じ
ていた私ではなくなりました。心地
いい居場所や大切な友だちにもた
くさん恵まれました。この町に暮ら
して、本当によかったと思います。
私にとってこの10年は、決して無
駄な時間ではありませんでした。い
ろんな人とつながっていることの喜
びを噛みしめられるようになったか
ら。

避難所で出会ったあのおばあ
ちゃんもきつとお元気で、穏やかな日
々を過ごしていらっしやることだ
と思います。



人が集まる町へ

できる人が

できることを

震災後200人以上の避難者を受け入れた特別養護老人ホーム「ひろやす荘」。施設長の永田恭子さんは避難所での経験を生かし、高齢者福祉の分野を超えた新たな視点で地域づくりに取り組んでいます。

なが た きょう こ
永田 恭子

特別養護老人ホーム「ひろやす荘」
施設長



駆け付けた職員見て 理事長「立て直せる」

前震時は惣領地区の自宅にいました。突然の激しい縦揺れで全ての家具が倒れ、ガラスが割れました。私とはとにかく施設のことが気になり、車を走らせました。5分ほどで到着したと思います。ひろやす荘は耐震構造のおかげで大きな被害はなく、入居者も職員も無事でした。道向こうにある介護老人保健施設「ケアポर्ट益城」は地盤が損壊し全壊認定となりましたが、入居者の皆さんは無事で。奇跡だったと思えます。

本震の後、老健施設の入居者59人はひろやす荘に移動してもらいました。ライフラインは全て止まりましたが、非常用電源が作動し、真っ暗な中、ここだけに明かりが灯っています。

福祉支援団体から応援の申し入れがあり、そのおかげで入居者の介護に専念できるようになりました。

避難者の“自治会” 秩序と交流が自ずと

避難者の皆さんに、施設で備蓄していたアルファ米やみそ汁を朝食に出しました。すると昼どきになって「昼飯はまだね」とか「毛布ば持って来て」と頼む人が出てきました。そこで、皆さんに集まってもらい、「ここは指定避難所ではございません。命あってのご縁で皆さんは集まっておられます。気持ちよく生活できるようにルールを決め、できる人ができることをやってください」と協力を呼び掛けると、なんと拍手が起きました。

避難されていた方の中に学校の先生とか事業をされている方とか、

たので、続々と町民の方が避難して来られました。指定避難所ではなかったのですが、来られた方は着の身着のまま、けが人もいました。途方に暮れている人たちを受け入れないという選択はなかったですね。

夜勤の看護師が止血などの応急処置に追われていると、帰宅していた職員が入居者と施設を案じて次々に駆け付けてくれました。それに勇気づけられた理事長が一言「これで立て直せる」。一つのターニングポイントだったと思います。

自衛隊や九電に直訴し 水と電気を確保

翌日、緊急ショートステイの受け入れを開始。本震後はさらに避難者

が増えたので、ホール周辺の仕切りを外して広い空間を確保しました。避難者は200人以上になり、入居者やショートステイ利用者、職員とその家族などを合計すると500人以上になりました。

本震の後、確認に訪れた自衛隊に「給水車を寄こしてください。駐車場があるので、近くの方も水を取りに来られます」と直訴すると、その日のうちに給水車が来てくれて。九州電力にも「緊急事態です。高齢者の命に関わります」と訴え、停電の早期復旧をお願いしました。すぐに発電車が来て19日に電気が応急復旧、給湯も一部復旧しました。

17日には訪問ボランティアナースの会「キャンナス」さんをはじめ、

PROFILE

1965年、熊本市生まれ。特別養護老人ホーム「ひろやす荘」(益城町安永)施設長。



リーダーシップを取れるような方たちが自ら手を挙げてくださった。避難所の自治会ができました。困り事や欲しい物などをホワイトボードに書き込んで共有し、中学生や高校生には避難者の名簿作りをお願いしました。他の方も水の運搬や室内の掃除などを自主的にやっていたきました。皆さんは明るい時間に自宅の片付けや掃除などに行き、施設に戻って寝泊まりする毎日でした。朝はお互いにあいさつを交わし、高齢者と子どもたちの交流ができました。さまざまな年代の方が互いに協力して暮らしていたんです。

4月29日に益城町、5月1日には厚生労働大臣の視察があり、13日になってそれぞれから、ひろやす荘を地震発生直後にさかのぼって福祉避難所に認定するとの通達を受けました。あっぷ教室」や「地域サロン」、「元気教室」などにも講師を派遣しています。みんな生き生きと働いてくれています。利用者や地域の方も、場所、知識などいろいろなものを提供してください。ほかに、熊本大学や県立大学、県立球磨工業高校などのまちづくりプロジェクトとも連携しました。地震の後から続けていたこうした取り組みを、当初は主に地域総合支援室が主導していました。その主導権を町民に、地域の人たちと一緒に考えて2018年、NPO法人「チーム安永」を発足しました。ひろやす荘が事務局を務めています。ただ、コロナ禍でいろんなことが中断しました。「なにもしない方が楽」「リスクがあるならしない方がいい」と思ってしまう、そんな怖さを感じました。でも、そこを選びたくないというのがあります。人が

一時200人以上いた避難者は、数カ月すると仮設住宅など次の落ち着き先が決まり、徐々に減っていきましました。発災から121日目の8月12日は、最後の7人が仮設住宅に行かれた日。避難所の閉所式を行い、お世話になったボランティアの方々とも涙のお別れをしました。

「地域総合支援室」から「チーム安永」へ

支援してくださったボランティアは本場にスーパーヒーローでした。「介護職ってこんなにすてきなんだ」というのを見せてくれました。その活躍ぶりに触発されて翌年、災害支援チームを作り、災害が起きた際は被災地支援に入りました。2020年7月の球磨川の氾濫や広島島の土砂災害。千葉や大阪にも行きました。災害支援チームで行って帰ってきたときの職員は目の色とか輝きが違っ

いっぱい出入りしていたときの見通しの良さ、風通しの良さを、私たちの施設は大事にしていきたいと考えています。入居者のことを考えると感染症など神経質にならざるを得ないところもありますが、地域の人たちが気軽に出入りできる環境をつくるというのをコロナに負けずにやっていければと思います。子どもたちの寺子屋として、お習字やそろばん塾もしています。

高齢者の思いと若い感性を大切に

震災で失ったものは大きかったですが、得がたいご縁をひしひしと感じました。益城町では防災を意識したまちづくりが進んでいます。みんなの力で震災復興のシンボリックな町にしたいですね。今は、自然災害だけでなく、人材不足や感染症という「同時複合災

んですね。人のためになっている感覚を肌で感じたのでしょうか。

さらに私たちは高齢者福祉を超えた地域づくりに取り組みたいと思います。「地域総合支援室」を立ち上げました。災害時は、できる人ができることをやるのが基本だと実感して、できる人を増やしたいと思いました。そして地域の方たちと関係性をつくっておくと、それぞれがWin-Winになると思います。

施設では週5回、運動教室を開いています。地域の方にとっても好評です。この運動教室「美・ウォーキング」は、美しく歩くために、筋肉をつけ、体幹を鍛えます。町のさまざまな場所をランウエー(花道)に選び、レッドカーペットの上を歩くイベントなども開いて楽しんでいきます。理学療法士が講師を務めるのですが、栄養士など資格を持つ職員がたくさんいるので、「体力

害」の時代です。線状降水帯発生による水害も多発していて、10年前とはかなり変わってきています。経験したことを生かして、まちづくりをどんどんバージョンアップする必要があると感じています。

人は楽しい所に集まるものです。皆さんが生き生きと暮らせるよう、高齢者の思いを大切に、若い人の感性を面白がる益城町であってほしいと願っています。



伝えたいのは

地震の悲惨さより 心のあり方

東日本大震災ではボランティア活動を行った永田忠幸さん。
熊本地震をきっかけに、語り部活動を始めました。
そこには地震の記憶だけでなく、
これからを前向きに生きるための
メッセージが込められていました。



東日本大震災での
活動が生きる

前震と本震。これまで体験したことの無い揺れに襲われながらも「生きていく」と実感したそのとき僕は、初めて被災者としての心境というものを理解できた気がします。

それは、2011年3月11日に起きた東日本大震災のこと。テレビから流れてくる悲惨な映像と、子どもたちの悲鳴や不安な顔に耐えられずにいた僕は、ボランティアの友人から応援依頼を受けました。「軽トラックが一台でも必要」との要請によりその4日後、熊本から被災地の宮城県石巻へ軽トラックで向かうことに。

到着してすぐに集積所へ派遣されました。全国から続々と届けられる支援物資の保管作業。けれど、保管



中に消費期限が切れ、被災者に渡せずじまいの食料が山ほど残ったんです。それらを廃棄処分しなければならなかったつらさといったら。

倒壊した家の片付けにも向かいませんでした。あるお宅の食台の上に残ったしょうゆ瓶を見て、その瞬間まであった日常が一変してしまったことに、涙があふれて止まりませんでした。

被災者の中には僕たちの作業を声もなく見つめる人もいて。きつと「これからどう生きていこう…」という思いの中におられたんでしょう。

その東日本大震災から5年後、熊本地震が発生。被災直後から僕は消防団員として活動し、「津森地区の人々を避難させてくれ」との指示を受け、JAの倉庫に人々を避難させ

ていたときでした。倉庫に支援物資が運ばれてきて、その作業を手伝うことに。石巻でのことが役に立つかもしれない…と何か運命のようなものを感じました。

まずは「先入れ先出し」を優先し、全国からの支援物資が無駄にならないようにと考えました。全てが上手くいったわけではなかったけれど、5年前の石巻でのことが走馬灯のように蘇って。そして自身も被災したことで、あるとき杳然と立ちすくんでいた被災者の心情を重ねました。

悲観しても戻らない
頑張らにゃんな

気持ちが少し落ち着いていたのは、地震から3〜4週間ほど経ったところ。

集積所の管理作業をしてくださる業者さんが入ると、ようやく自分の家のことに携われる時間ができました。家も傾いたまま、水も電気もきていませんでした。留守をしていた間、両親は避難所と被災した自宅を往復しながら気丈に過ごしていてくれました。

近所の人から「あたんこのキャベツ畑が、ひどいことになっとるばい」と教えられて見に行くと、そこには直角の断層が現れていて…。布田川断層の真上にあつたその場所は、のちに震災遺構として国の天然記念物に指定されました。

断層の向こうの道から堂園を見たとき、ひどい状況になっていることに、本当に不謹慎だけど、笑えてしまったんです。どういう心境だったか紐解くのは難しいけど、「こんなことになるんだ」って。

PROFILE

1983年、益城町生まれ。県外の大学に進学後、25歳で益城町に戻り農業を始める。33歳の時に被災、その後語り部として活動。これまでに延べ3万人以上に伝えている。



ものごとの捉え方は自分で選べる

僕はもともと楽観的な性格だけど、どんだけ悲観しても戻らないものは戻らないんだと。まだまだ体も動くし、仕事もできる。そんなら「頑張らにゃんな」とも思いました。

熊本地震の年から、僕は語り部の活動を始めました。きっかけは「熊本にボランティアで来る人に、益城町のことを説明してくれないか」と知り合いから頼まれたことから。その後、益城町の「語り部養成講座」に参加し、修学旅行生や一般の方に向けて案内するようになりました。

僕が語り部として伝えることは、大きく分けて2つあります。

一つは、地域に伝わる昔話。この辺りには、「蛇ヶ谷」や「龍池山」など、蛇や龍にまつわる地名が多く残っています。地震っていう概念が

こうした話も聞いてもらいたい。

「熊本の修学旅行は楽しかったな。また行きたい」「あのときの変なガイドさん、おもしろかったな」って思い出に残ったらうれしい。

伝えたいのは過去より先のこと

僕たちはこれからも自然災害と付き合っていくかといけないと思うんですよね。たとえ被災したとしても「益城町みたいに頑張ろう」って思ってもらえるような、人々を元気づけられる町、目標にされる町になつたらいいなって思っています。

語り部には「地震の記憶を風化させないための語り」を求められるんですけど、忘れた方がいいこともあるのでは、と考えています。人って、忘れられないことの方が苦しい気がします。だから僕は、地震の記憶を伝えるというより、これから先の

なかった時代の人たちは、地表の断層が蛇や龍の動いた跡に見えたそう。

実は伝えたいのは昔話そのものじゃないんです。各地から来る子どもたちが「自分の街には、どんな言い伝えがあるんだろう？」と自分の土地に興味を持ち、見つめ直すきっかけになればいいなと思うんです。

二つ目は、自分自身の心のあり方の大切さについて。仮設住宅で過ごしているときのことです。届いたアンケートに「困っていることはありますか？」という質問項目がありませんでした。僕は仮設住宅で困っていることがないから。それでも「困っていることを探さなきゃ」と考えたときに、以前の家での生活と比べてみるわけです。当然のことながら、「そういうええことが不便だな」というものが見えてきて。

つまり人間って、意識的に見ようこと”を伝えていける語り部になれたらいいなって思っています。地震のことは、1年に1回でも防災について考えるきっかけにしてくれたらうれしいです。備えのチェックも大切だけど「自分が大切にしたいものは何か」を考えるきっかけになればいいかなと。それ以外のは、災害のことは忘れてしまつて大丈夫。僕はそんな風に考えています。

「日常が戻ったか」と聞かれると、答えるのが難しいですね。地震前に戻ることを「日常」とするならば、全然戻ってない感じがします。でも、自分の心の状態が変わっているの、それを「日常」と捉えるのが難しいなって。例えば農業の仕事で言えば通常運転に戻ったのはここ1年くらい。水害などの影響もあり、いつも自然との戦いです。

ただ、僕の場合は「町は復興している」と思っています。「そうで

としているものが見えてくる生きものなんだな、と。「地震のせいだ」と思いながら生きていると、失ったものばかりが見えてくる。逆に「地震のおかげで」と思えば、出会えた人や気付けたことが見えてくる。この違いは、人の生き方や考え方を大きく左右すると、そのとき思えたんです。

ただ、僕は「出来事すべてを『〇〇のおかげで』と思いましよう」と言いたいわけじゃないんですよ。訪れる子どもたちには、「ものごとをどういう視点で見ると、見えてくる世界は変わってくる。それは、自分自身が選べることなんだよ」って伝えたいんです。

修学旅行で熊本を訪れる子どもたちって、みんな旅行を楽しみに来ているんですよ。暗い気持ちで帰ってもらいたくないんです。だから、地震の怖さや無情さばかりでなく、

はない」と考えると、どうしても足りないところばかりに目がいつてしまう。町の職員さんたちも頑張ってくださいっているし、県外からの支援もたくさんいただいている。それぞれが自分の仕事を一生懸命やってくださったおかげで、地震からの10年を迎えられた。だから「足りない」という感覚は一切ないですね。

今あるものや頑張ってくれている人たちに「ありがとう」と伝えられることの方が、気持ちいいじゃないですか。起きたことはもう変えられない。変えられるのは、自分の考え方や心の持ちようだけではないでしょう。

